

促成オクラの栽植密度と間伐に関する試験

保坂 勇・畠山 順三

(秋田県農試)

たつて、栽植密度と間伐について試験を行なったのでその概要を報告する。

1 ま え が き

施設利用の有利な作目であるキュウリ、トマトについて、新作目としてオクラが取り入れられ、これが最近、需要が著しく伸びているとともに価格も安定していることから、促成オクラの早期収量を確保するにあ

2 試 験 方 法

第1表に示す。

第1表 試 験 区

試験区 No.	栽植密度 3.3 m ² 当り株数			処 理 目 標	最終栽植密度 3.3 m ² 当り株数		
	畦 幅	株 間	定 植 時		畦 幅	株 間	間 伐 後
1	100	20	20.0	1株当り5個収穫後 間伐	100	40	10.0
2		25	16.0			50	8.0
3		30	13.2			60	6.6
4		40	10.0			40	10.0
5		50	8.0	50		8.0	
6		60	6.6	60		6.6	
				標 準			

1 供試品種

パーキンススピネスポッド

2 播 種 期

2月1日 6cm×2cm点播

3 仮 植 期

2月10日 (子葉展開時) 15cm鉢上げ

4 定 植 期

4月1日 (本葉4.5枚時) 60日育苗

5 1区面積および区制

1区 2.5m² 3区制

第2表 間伐時の生育調査 (定植後60日, 6月1日)

試験区 No.	栽 植 密 度		茎 長	展 開 数	平 均 節間長	最 大 葉		草 幅	茎 径	第 1 莢 着生節位
	畦 幅	株 間				た て	よ こ			
1	100	20	90.4	14.0	7.5	23.5	32.9	80.6	1.8	10.0
2		25	90.2	14.8	6.1	26.5	37.0	91.4	2.0	9.7
3		30	88.9	14.9	6.0	27.0	43.4	92.9	2.4	8.4
4		40	85.2	15.2	5.6	30.1	45.0	91.7	2.4	8.7
5		50	88.2	15.0	5.9	29.6	44.2	90.9	2.4	8.6
6		60	87.0	16.2	5.4	29.9	44.4	98.0	2.4	8.5

第3表 時期別収量および総収量 (2.5 m²当り)

試験区 No.	栽植密度 3.3 m ² 当り株数					間伐前 (早期) 収量			
	定植時		間伐後			上物		下物	
	畦幅	株間	株数	株間		個数	重量	個数	重量
1	100 cm	20 cm	20.0 株	40 cm	10.0 株	112 個	2,010 g	5 個	86 g
2		25	16.0	50	8.0	78	1,459	6	83
3		30	13.2	60	6.6	66	1,240	4	45
4		40	10.0	40	10.0	52	1,067	6	100
5		50	8.0	50	8.0	62	1,266	4	72
6		60	6.6	60	6.6	54	1,031	3	35

試験区 No.	間伐前 (早期) 収量		総収量					
	計		上物		下物		計	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
1	117 個	2,086 g	279 個	6,260 g	5 個	86 g	284 個	6,346 g
2	84	1,542	286	5,879	6	83	292	5,962
3	70	1,285	273	5,990	8	116	282	6,103
4	58	1,167	296	7,267	11	230	307	7,497
5	66	1,338	310	6,126	4	72	314	7,026
6	57	1,066	304	7,383	3	35	307	7,438

3 試験結果

高温性の作物であるため、育苗期間中は3.3 m²当り電熱500W配線十こも被覆管理し、地温は常に20℃を確保に努めたが、3月4半旬ころまでは夜間の気温が15℃以下に経過したため、葉緑素の生成が悪く、本葉に白化現象がみられ、初期生育はやや停滞ぎみに経過したが、3月5半旬以降気温の上昇に伴って回復した。

定植後の生育については、株間20 cm, 25 cm, 30 cmの密植区ほど徒長軟弱の傾向がみられ、また、第1莢は、開花直後に灰色かび病が発生したことから、標準区に対し密植区は、第1莢着生節位が1~1.5節高節位に着生したため、収穫始は1~2日遅れた(第2表)。

収量についてみると間伐前の早期収量は、株間20

cm区>25 cm区>30 cm区>40 cm区>50 cm区>

60 cm区の順に密植区ほど多かった。1株当りの収量においては株間40 cmまでの密植区では6個前後に対し、50~60 cmの粗植区は8~9個の収量であった(第3表)。

間伐(6月1日)後の収量および総収量については、株間60 cm区>50 cm区>40 cm区の順に多く、1株当り収量も同じ傾向を示した。このことから、粗植区は6月上旬以降主枝と側枝が同時に収穫されたものと考えられる。

以上のことから本県におけるビニールハウスの促成オクラの経済的な栽植密度は、株間40 cmの3.3 m²当り10株植の無間伐が実用性が高いものと考えられ、次年度は低温寡照条件における播種期と育苗日数についてさらに検討する。